

第Ⅱ章 名勝の概要と構成要素

第1節 概要

本節では、第Ⅰ章第1節1「名勝の指定説明」(P. 1)を元に、自然・歴史・社会の各分野における概要と名勝周辺についての説明を行うこととする。

1 自然的環境

二見浦は、紀伊山地の東端と伊勢平野との接点にあたり、伊勢湾南岸の五十鈴川とその支流江川（五十鈴川派川）流域等に発達する低地は、全て沖積低地である。このうち、千尋浜・立石崎・清渚・打越浜・高城浜と続く海岸平野には旧海岸線の変遷を示す3条の浜堤が形成されている。五十鈴川は、明応年間（1492～1500）までは、本流が江川の方向に流れ、江海岸に注いでいたが、明応7年（1498）8月の大地震によって地盤が隆起し、陸化したため流下方向が変化し、現在の汐合川が本流となった。

江川の河口に位置する立石崎を境に海岸線の様相は異なり、立石崎の西方、今一色の高城浜までは、立石崎を起点に西方に向けて発達した砂丘が五十鈴川河口を塞ぐように延び、宮川や五十鈴川等から流出した土砂が遠浅の砂丘海岸をなしている。立石崎から東方は、西南日本外帯の山地が海岸線を形成し、湾入地形と岬の地形が交互に繰り返され、山地の一部が海面下に沈んだ形の、いわゆるリアス式沈水海岸である。海岸は、ほとんどが海水や磯波の激しい海食によってできた岩石海岸であり、各所に急峻な海食崖や神前岬の潜島のような海食洞門を形成している。このほか、立石（夫婦岩）をはじめとする大小の離れ岩や岩礁・暗礁が多数点在しているのと、小規模な陸繋島の地形も発達している。

周辺の地質は、日本列島最大の断層である中央構造線が二見浦の付近を東北東から西南西方向に通ると推定されており、当地は西南日本外帯（三波川帯）に属し、山地を構成する三波川結晶片岩と平地を形成する第四系とで構成される。

立石崎と神前岬に至る神前海岸（千尋浜）の海食崖は、緑色片岩類からなり、立石の緑色片岩中の藍閃石は変成鉱物として有名である。二見町内には、多数の「謂れ石」や「名物岩」があり、その代表的なものが夫婦岩とよばれている立石である。

立石は、立石崎にある海食によって生じた離れ岩であり、大岩（男岩）は緑色片岩、小岩（女岩）は石英片岩と岩質が異なる。ただし、小岩は、大正7年（1918）の台風で折れ、やや南方に移動し傾いてしまったため、その後補強、固定したものである。

この地域の植物は、常緑広葉樹や海浜植物等に熊野灘から続いている暖地性のものが多く見られる。また、御塩殿神社の社叢は、昭和34年（1959）の猛烈な伊勢湾台風の被害も比較的少なくすんだもようで、森の中に立ち入ってみると大木、老木の密林が昔の面影を止めている。

二見浦の砂浜海岸にはクロマツの並木が連なり、白砂青松の美しい海浜景観を形成している。二見浦公園や海水浴場付近のクロマツはマツノザイセンチュウ防除剤の樹幹注入により良好な状態を保ってきたが、近年、今一色付近の松林にはマツクイムシの被害が多く見られるようになり、名勝指定地内においても二見浦公園（旅館街裏手）で樹幹注入剤が